～四旬節黙想会～

そこまで私たちのためにして下さる神様、喜んで十字架に向かわれたイエス様を私たちは信じているのです。とは言っても私たち自身が苦しむとき、私たちの周りの愛すべき人が苦しんでいるときに私たちの信仰は揺らぐものです。

戦争が至る所で起こり、災害に見舞われるなど、この世の不条理に直面するとき、私たちは何もできないことを痛感します。

数日前に前田枢機卿様が書かれたエピソードを目にしました。
「私（前田枢機卿様）はある国の高官から『宗教者は戦争をなくすために何ができますか？』と尋ねられました。」　前田枢機卿様は「祈ることができます。」と答えられたところ、「祈ることで何が変わりますか？」と返されました。祈っても何も変わらないんじゃないか、ということですね。

枢機卿様は「祈ることで、信じることができます。希望を持つことができます。愛することができます。」と答えられると、その方は「宗教者に与えられた使命は大きいです。よろしくお願いいたします。」と励まされました。

もちろん私たちは災害に合われた方に対して具体的な助けの手を差し伸べることは大切です。しかし、私たち信仰者はすべてを与えてくださる神様に祈ることによって信じること、希望を持つこと、愛することを願う事こそが大切です。

今日読まれたこのローマの手紙の前に信仰について次のような言葉があります。
「神を愛する者たち、すなわちご計画によって召された者たちには万事が益となるように共に働くということを私たちは知っています。」

『万事が益となる』すべての事が私たちにとって益となる、そのことを知っていることそれが信仰である。

どんなことが起ころうとも、それがみ旨ならばそれが何らかの形で有益となる。神様は私たちを命あるものとして作ってくださいました。

命あるものはいずれすべて滅びるわけです。霊は死んでも復活して永遠の命に生きることを知っていますが、肉体は死んで滅びます。神様は肉体も滅びないように作ることも出来ましたが、そのようにはされませんでした。

けれども死ぬほど苦しい時にも祈ることによって信仰と希望と愛を持つことができるようにはして下さいました。私たちは十字架のイエス様を見つめる時、そのことを思い出す訳です。

今日の旧約の朗読で『地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたが私の声に聞き従ったからである。』

そして福音書には『これは私の愛する子。これに聞け。』と述べられています。

アブラハムが神の声に忠実であった様に、弟子たちがイエス様に従った様に私たちが四旬節中にどれだけ神様の声を聴き、心を神様の方に向けることができるか、毎日少しでも結構です、回心の時間が持てるようにしましょう。